

論文審査の結果の要旨および担当者

| | | |
|------|-------|---|
| 報告番号 | ※ 甲 第 | 号 |
|------|-------|---|

氏 名 杉浦 克哉

論 文 題 目

A Synchronic and Diachronic Study of Gerundive and Participial
Constructions in English

(英語における動名詞と現在分詞に関する構文の共時的、通時的研究)

論文審査担当者

主査 名古屋大学教授 田中 智之

委員 名古屋大学教授 大室 剛志

委員 名古屋大学教授 町田 健

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、英語における動名詞と分詞を含む構文について共時的・通時的観点から考察し、その統語構造の史的変化を解明することを目的としている。第1章では、本論文で取り扱う遡及的動名詞、分詞関係節、with 独立構文、分詞前置について概観し、枠組みとなる生成文法理論を簡潔に紹介している。

第2章では、目的語が主節主語に遡って解釈される遡及的動名詞の統語変化について考察している。まず、電子コーパスを用いた調査により、worth 等の評価を表す述語が選択する遡及的動名詞は16世紀に出現し、17世紀中に名詞的動名詞から動詞的動名詞に再分析されたことを観察している。その遡及的解釈については、動名詞の目的語位置から軽動詞句の指定部に空演算子が移動し、その空演算子が主節主語に束縛されることにより得られると主張している。一方、need 等の要求を表す述語が選択する遡及的動名詞は英語史を通じて名詞的動名詞であり、主節述語と動名詞の主題役割が関連付けられることにより、遡及的解釈が生じるとしている。第3章では、電子コーパスを用いた調査に基づき、名詞を後位修飾する現在分詞である分詞関係節の歴史的発達について論じている。まず、古英語における現在分詞は形容詞であったが、中英語における形容詞屈折の消失により現在分詞は動詞的範疇へと再分析され、目的語を伴う分詞関係節が出現したと主張している。そして、be 動詞を用いた進行形の確立を契機として、類推により分詞関係節が16世紀に相を表す機能範疇を持つようになったことを、遊離数量詞と相副詞の分布から実証している。

第4章では、with に主述関係が後続する with 独立構文の歴史的発達について、述部に ing 形を伴う事例を中心に考察している。まず、古英語における with 独立構文は様態や付帯状況のみを表していたが、14世紀に文頭に生じるようになったことにより、語用論的推論から時や理由を表す用法が出現し、その後現代英語にかけて頻度の上昇とともに条件や譲歩等の様々な用法が確立したことを、電子コーパスを用いた調査に基づき観察している。すなわち、この歴史的発達は語用論的推論や意味の漂白化を伴う文法化であることになるが、その最終段階として20世紀に入ってから with が前置詞から補文標識に再分析されたと主張している。第5章では、現在分詞や過去分詞を主要部とする句が be 動詞の前に現れ、主語が be 動詞に後続する分詞前置の統語構造について論じている。分詞前置における分詞句が話題として機能し、主語が一般に重い名詞句であることから、分詞句が話題句の指定部に移動し、主語が重名詞句転移の適用を受けるとする分析を提案している。さらに、前置と削除現象の類似性に基づき、分詞句がフェイズと呼ばれる独立した単位を構成しているため、文頭に移動可能であると主張している。第6章では、本論文の内容の総括、本論文の経験的・理論的貢献を述べるとともに、残された問題とその可能な解決策を提示し、今後の研究動向を展望している。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

現代英語において動名詞と現在分詞は同じ *ing* という形式を持つが、それらを含む構文を包括的に取り扱った研究は少なく、さらに通時的観点を取り入れた研究がほとんどないのが現状である。本論文は、現代英語に関する研究さえもあまり進んでいない、遡及的動名詞、分詞関係節、*with* 独立構文、分詞前置について共時的・通時的観点から考察した体系的研究であり、特に以下の2点において非常に高く評価される。

第一に、電子コーパスを用いた丹念な資料調査により、動名詞と分詞を含む構文の歴史的発達を明らかにしたことが挙げられる。第2章の遡及的動名詞に関する調査では、評価を表す述語と要求を表す述語が選択する遡及的動名詞の用例を収集し、冠詞を伴う名詞的動名詞、前置詞残置等の特性を示す動詞的動名詞、名詞的・動詞的どちらにも解釈される動名詞に分類し、17世紀中に遡及的動名詞に再分析が起こったことを解明している。第3章の分詞関係節に関する調査では、分詞の形式を丹念に調べて形容詞屈折の消失時期を特定するとともに、分詞関係節における目的語、遊離数量詞、相副詞の出現に関する詳細なデータを提示している。第4章の *with* 独立構文に関する調査では、用例の解釈を注意深く観察することにより、様態や付帯状況を表す用法から始まり、様々な用法へと拡張したことを実証している。これらの調査により、動名詞と分詞を含む構文の歴史的発達の全体像を明らかにしたことは、言語事実の発掘という経験的領域における歴史言語学に対する大きな貢献である。

第二に、それぞれの構文の各時代の統語構造を提示し、統語構造の変化を再分析の観点から説明していることが挙げられる。再分析は生成文法理論に基づく通時的研究において最も重要なメカニズムの1つであり、本論文はそれを動名詞と分詞を含む構文に適用した事例研究として高く評価される。また、再分析を引き起こした動機として、遡及的動名詞については冠詞の脱落と前置詞句による修飾の出現、分詞関係節については形容詞屈折の消失と *be* 動詞を用いた進行形の確立が提案されている。このように、言語変化に対して、動機とメカニズムの両面から説明を試みている本論文の議論は非常に説得力がある。

しかし、本論文の考察に問題がないわけではない。第4章の *with* 独立構文に関する議論では、*with* の文法化に重点が置かれるあまり、*ing* 形を含むその補部の統語構造について十分な検討がなされていない。また、第5章で提示されているデータの大部分が現代英語のものであり、分詞前置に関する通時的観点からの考察が不足しているという問題もある。しかし、これらの問題は今後の研究によって解決可能であり、丹念な資料調査に基づく動名詞と分詞に関する共時的・通時的研究である本論文の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するのに相応しい水準の研究であると判断した。